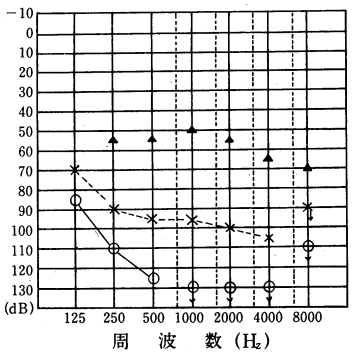
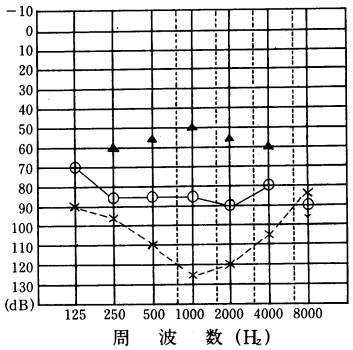
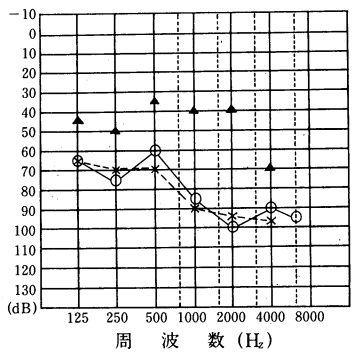
表1　各児童の実態と指導のねらい

児童	聴力及び補聴器の装用状況	発達及び言語学習状況	家庭及び言語環境	ねらい
M・K（男）	オージオグラム  補聴器 左耳　HB−09　vol 3　N⊘H	小学部入学の4月より補聴器の装用を始めた。ピョン、ピョンブーブー等のオノマトペ、あいさつの数語の使用が始まった段階で、身振りによる理解・表現が主である。 聴覚活用は、学習や検査場面で音のon−off 母音の異同弁別等が可能だが、日常生活で聴覚情報に気づいたり、理解しての行動は少ない。 未分化な発声が多いが、口形やイントネーションを意識した口声模倣がみられるようになってきた。 WPPSI−動作性 IQ77	父、母、姉、2人、本児の5人家族。同居者に難聴者はいない。 難聴の発見は、1歳6カ月、3歳で聾学校の幼稚部に入学するが、両親に早期教育の必要性の意識は希薄で、欠席が多く、指導はほとんど受けなかった。現在は家より離れ隣接の学園より通学している。	口声模倣で同じリズムで1音、1音模倣する傾向がみられたので、リズムやイントネーション情報に気づかせ、聴覚活用の日常化をすすめる。 季節や行事に応じた語いの理解と定着をはかる。
K N（男）	オージオグラム  補聴器 右耳　HB−09　vol 2　N⊘H 左耳　HB−09　vol 2.5　N⊘H	視覚情報による場面の理解は速いが、話を終わりまできかない。キイワード反応が多く、音声言語を文単位で受容していない。 聴覚を通して、リズム、イントネーション、音韻の一部をききわけできるが、手話や身振りによる表現が活発で、場面情報依存の傾向が強いため、助詞や話の学習があいまいなままである。 WPPSI−動作性 IQ104 言語性 IQ 45 絵画語い発達検査 語い年齢　2歳以下 （CA 6歳2カ月） ITPA−全PLA　4歳8カ月） （CA 6歳2カ月）	母、姉、祖父母、本児の5人家族。家族に難聴者はいない。 母親の仕事のため、幼稚部4歳児の時から家を離れ、隣接の学園より通学している。学園では、身振りや手話の使用が多い。	季節や行事に応じた語い、文表現の理解と拡充をはかる。 文字との対応により音韻の学習を進め、音像の確立をはかる。 ことばの持つリズムやイントネーションの特徴やおもしろさに気づく。
I・A（女）	オージオグラム  補聴器 右耳　HB−09　vol 2　N⊘H 左耳　HB−72　vol 2　L Cut⊘ H Cut⊘	2〜3語のつながりで理解したり表現したりできるものが多くなってきた。しかしまだ、助詞の誤用、脱落、語い不足のため、自分が表現したいことを十分に表現できないことがある。 聴覚的には、周囲の音によく気づき、何の音か質問してくる。 音声言語面でも、リズム、イントネーション、音韻の一部のきき分けができる。又、音韻の類似に気づき報告してくる。 WPPSI−動作性 IQ97 言語性 IQ50 絵画語い発達検査−語い年齢 2歳0カ月以下 （CA 6歳1カ月） ITPA−全PLA　4歳9カ月	父、母、本児、弟、祖母の5人家族。 共働きのため、登校下校時の付き添い、日昼の世話は祖母がしている。家族に難聴者はいない。 難聴の発見は、2歳9カ月と遅く、聾学校での教育開始は5歳児からと遅かった。	季節や行事に応じた語い、文表現の理解と拡充をはかる。 文字との対応により、音韻の学習を進め、音像の確立をはかる。 ことばの持つリズムやイントネーションのおもしろさ特徴に気づく。

※　オージオグラム（聴力測定図）の▲印は、骨導による検査
○印は右耳の、×印は左耳の気導による検査である。

⬅31ページに続く